

悠久の名作シリーズ(5)

『送元二』 王維

中国第一の送別詩『渭城曲』

古来唱い継がれた『陽関三疊の曲』

本来「元二の安西に使いするを送る」と題するこの詩は、

唐時代の送別詩の中でも出色の作。「樂府詩集」において、「渭城曲」と題するこの名曲は、中国のみならず我が国においても広く愛唱された送別詩。この詩にはしみじみとした友情が溢れ旅立つ者の心をうつので、古くから別れの宴や有人知己の誰かを送る時、この詩を一度ならず歌われたであるに違いない。今はるかな西域、安西へ派遣される元二を送る。静かなる哀愁、胸をつく別離の情が尽きず知らずのうちに第四句目を繰り返して歌われたので、いつしか「陽関三疊」との別名が付けられた。その歌い方はさまざまではつきりしないが、「無からん 無からん、故人無からん、西のかた陽関を出ずれば 故人無からん」と歌われるのが最も普通らしい。

元二に送るはなむけのうた

渭城まろの巷に朝の雨

黄色なみちが濡れている

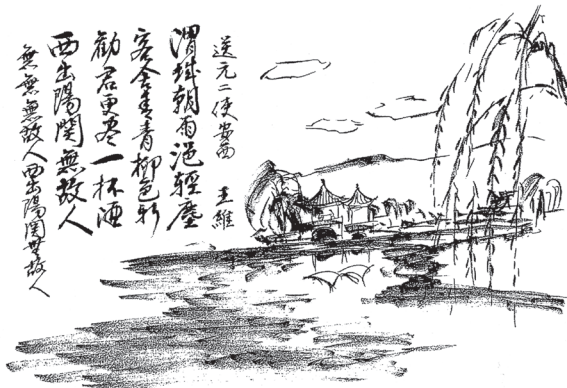
やどの柳はうるうると

生まれたときの緑いろ

心ゆくまでのんだ夜

いざ別れの朝がきて

さて杯をもっと干せ



王維送別の名作はこうした背景の中で生まれた。

王維は、田園詩人 陶淵明の申し子

王維は六十一歳で死ぬまで官僚であつたにもかかわらず、受ける印象はむしろ隠者としての姿である。三十三歳の時最愛の妻を亡くすという不幸の中で次第に山に隠るこ
とや仏教へ信仰を深めていった。

秦嶺山脈の山ふところに有る終南山の一角輞川^{もろせん}。かつて則天武后^{てんぶこう}の時代、宮廷詩人であつた宋之問^{そうしもん}が所有していた大きな別荘を買い取つて輞川莊と名づけた。

公務の合間に友人裴迪^{はいてき}と共にやつて来ては閑適の暮らしの中から王維の名作は生まれた。輞川二十景のうちから作られた「鹿柴^{ろくさい}」や「竹里館^{ちくりかん}」なる自然詩は、六朝時代田園詩人といわれた陶淵明の大きな影響を受けて、三百五十年の後に継承され、王維によって淵明の名は優れた位置に押し上げられたと言つても過言でない。

鑑賞と研究

この詩がいつ頃のものか、元二という人物はどういう人だかはっきり分らないが元二という家の二番目のせがれであつたろうと思われる。ただ元二と俳行^{はいこう}で呼ぶにはもっとも親しい間柄であつたことが窺える。しかしこの詩の内容を見る限り決して王維の若い頃の作品であ

るとは思えない。だったらエリートを経て高官の地位にあつた王維と、うじ素性のわからない元二との身分の差を考えたとき、わざわざ渭城まで見送ることなど有るのだろうか疑問を感じずにはいられない。だがそれを解消する接点らしきものが見当たらない。それはともかくとして現に物語はその元二が遠い遠い安西まで行くのである。

安西は現在のトルファン。この詩では生きて帰れないかもしれない旅に出る友人を見送る悲しみを述べているのだが、その時の作者の心境は全く示されていない。悲しいとか寂しいとかの感情語が一語も使われていないのである。それでいて作者の気持ちは明確に読者に伝わってくる。ここに字の巧みな使い方と詩人の表現上の苦心がよく分かる。

前の晩心ゆくまで酒を酌み交し語り尽くしたはずなのに、翌朝いよいよ別れの時がきて王維はさあもう一杯と酒を勧めた。

「君に勧む更に尽くせ一杯の酒」作者の暖かい友情、万感の思いが「更に」の一字にこもると同時によくきている。効果あるこの一字が「もう一杯」の重みに迫り、尽きぬ名残が朝の情景の中に漂っている。

一・二句にさわやかで新鮮な明るい風景描写が詠まれているところが、却って別れにあつた作者の悲しい

心情を際立たせていることにも注目したい。